

【2005年度第1回研究会発表要旨】

サイバースペースの人類学

千田啓之

本発表は、インターネットに対する人類学的関心を「インターネットを研究対象としてとらえること」と「インターネットをツールやメディアとして利用すること」のふたつの側面に整理し、そのうち後者の背後に存在するある種の危険性を指摘することを目的としている。

メディア論などにおいて「サイバースペース」の可能性が語られていた時期には、インターネットが人類学の研究対象とみなされることはほとんどなかった。しかし近年のインターネットの日常生活への浸透の結果、人類学者もまたインターネットに目を向けるようになり、人類学がいかにインターネットを活用していけるか、というような議論があらわれてきた。

この問題を論じるために参考となる事例として、メキシコのサパティスタ運動をインターネット上において支援することの是非をめぐって西暦2000年に行われた「クリーヴァー・ヘルマン論争」をとりあげている。この論争では、ジュディス・ヘルマンが『現実』のチアパスがメキシコに存在するいっぽうで、『外部の』人びとはインターネット上に『仮想された』チアパスを構築している。前者のチアパスは真正なものだが、後者はインターネット上の支援者によって作りあげられた偽ものに過ぎないと主張し、論敵であるハリー・クリーヴァーは「インターネットは運動支援者達が情報伝達、討論、組織化を行うにあたってそれを高速化するに過ぎず、インターネットは距離や速度を圧縮するメディアとして『リアルな』空間内において機能する」とした。

ヘルマンが「リアル」と「ヴァーチャル」の単純な二分法を前提とし、インターネット上での支援運動の弊害を指摘するのに対し、クリーヴァーはそれらの支援運動の意義を評価している。しかしクリーヴァーのヘルマンに対する反論は、じつはヘルマンの提示した二分法をそのまま受け入れてしまった上に成立している。すなわち、インターネットはリアルな運動を相互にリンクさせるためのメディアであるに過ぎないと主張したとき、クリーヴァーもまた「リアル」なものに対して「ヴァーチャル」なものを対置し、ヘルマンが行ったのとは別の形でヴァーチャルなものを抑圧する言説を提示しているのである。

しかしサパティスタ運動におけるインターネットの位置づけは実際にはそれほど単純に割り切れるものではなく、それはむしろ「リアル」であると同時に「ヴァーチャル」でもあるという錯綜した様相を呈している。サパティスタ運動におけるシンボリズムを分析することで、「リアル」のサパティスタ運動には、インターネット上での「ヴァーチャル」な支援との相互作用が存在することが主張できるのである。

そして現在の人類学のインターネットに対する関心のありようには、「クリーヴァー・ヘルマン論争」においてみられたような二分法の陥穽に陥る危険がある。インターネットを研究のメディアあるいはツールとみなす発想は、クリーヴァーがインターネットは運動のメディアであると述べたその主張と同じ論理的な構造を持っているからである。たしかにインターネットを利用することにより研究者はさまざまな恩恵を期待できるし、インターネットを民族誌の新しいメディアとして活用することは人類学における実践・運動としての意義も持ちうるだろうが、インターネットを単なるツールあるいはメディアとしてあつかってしまうと、それを通じ得られるデータが、インターネットの独自の性質、すなわち既存のリアリティから遊離して

いることに由来する印象・情報操作の容易さなどによっていかなる作用を受けるかという側面への関心を見失わせてしまう危険性がある。

インターネットを研究のツールやメディアとして利用するというアプローチは、それがそなえるバイアスや不透明さに気づかざるを得なくなり、「リアル」と「ヴァーチャル」の二分法を越えてゆくようなところに収束してゆかなければならないだろう。

(ちだ・ひろゆき／北海道大学大学院)

トナカイ飼育における群管理と馴化技術：モンゴル北部ツァータンの事例

西村 幹也

本発表では、モンゴル北部に住むツァータンと呼ばれるトナカイ飼養民の紹介と彼らの主生業の一つであるトナカイ飼育の年間サイクルを概観した上で、トナカイの管理方法について発表した。

1. ツァータンについて

モンゴル国北部フブスグル県とロシア連邦トバ共和国国境付近に広がるタイガにツァータンと呼ばれる人々が居住している。ツァータンとはモンゴル語で「トナカイを持つ者」を意味するが、彼ら自身は「トバ」「オイガル」などと自称するトバ民族である。トバ語を母語とするが、1932年にトバとモンゴルの間で国境が制定されて以降、モンゴル政府の政策の元でモンゴル化が進み、現在ではモンゴル語しか使えないツァータンが増えている。元来、トナカイは輸送交通手段として用いることを第一義とし、小規模トナカイ群を所有し、主生業を狩猟採集漁労としていたが、社会主義政策のもと大規模トナカイ群牧畜を主生業とさせられた経緯を持ち、現在ではトナカイ牧畜と狩猟採集漁労活動の二大生業を営んでいる。

2. トナカイ飼育における年間活動の概観

現在のツァータンの生活サイクルをトナカイの飼育サイクルのみで語ることは非常に難しい。しかし、彼らの居住地・営地の決定は所有するトナカイ群の規模、および、トナカイの生態的特徴に大きく影響を受けているのは間違いない。そこで、まずはおおざっぱに彼らの活動を把握するためにトナカイ飼育の年間活動を概観することとする。なお、以下に述べる営地移動の時期は気候、群規模などによって大きく変わることがあることを断っておく。

3月末から4月前半にかけて、春営地に移動する。営地は群が散らばりにくい深い雪のある場所が選ばれる。ここでは出産管理と授乳管理が最大の関心事となる。また、これら出産・授乳管理と同時に馴化が始まる時期でもある。基本的に群に牧夫が付き従い、一日に数回、牧地と営地を往復する。

6月半ば頃には夏営地に移動する。夏営地は害虫のいない吹きさらしの山頂盆地が選ばれる。乳を多く得られる時期にあたり、頻繁な搾乳のための母子トナカイ管理が最重要関心事となる。また、現金収入獲得のためにトナカイの袋角の切断が行われることもある。群に牧夫が同行することはなく、搾乳用メストナカイと仔トナカイ以外の群は放置され、適宜、所在を確認に行く程度の管理しかしない。

8月末頃から、秋営地への移動を始める。秋期は特に気候変化が激しく、群が散らばりやすい上に、種トナカイが発情期を迎えるため、他の時期と比べて移動回数が多い。特に発情期前

から発情期と発情期後で営地を変える傾向があるようだ。秋営地での最大関心事は、初めての発情期を迎えようとする2歳オストナカイの去勢、種オス、メスの発情状況の確認・交配である。群には基本的に牧夫が付き従うが、地形を利用することで群を放置したままにすることもある。

11月はじめごろに冬営地へと移動する。冬営地は日当たりの良い場所に居住地を構え、雪の深い牧地が近くにあることが求められる。この時期は使役畜の所在確認は頻繁に行われるが、散らばった群を柵に集める以外、他の群は放置されたままになる。最大関心事はトナカイの肥育にある。

3. 群管理方法と馴化技術

トナカイ管理の方法には大きく分けて、「群分離管理」と「個別個体管理」がある。「群分離管理」とは、母畜群（出産母畜と未出産メス畜にわかれるときがある）、仔畜群、若畜群、被去勢畜群、種オスに群を分けてそれぞれ管理することを言う。これら個体群をそれぞれの季節で分離したり組み合わせたりすることで群全体の管理を容易なものにすることを目的としている。

「個別個体管理」とは、トナカイとの直接接触・接近による馴化を目的とした管理を言う。搾乳時の母仔畜との接触や日常的な授塩・授尿時の接近、接触、去勢による家畜化および使役畜化などを通してトナカイが自ら営地に戻ってくるようにする。また、季節によっては2頭ずつ繋いで放牧に出すなどの行動制限を施している。

これら方法はいずれも草原家畜の管理の方法と大差ないものであるが、草原牧畜的管理方法だけでは管理しきれない点を看過してはならない。「個別個体管理」において、年齢別個体名称の他に、一頭ずつに個別名称をつけて個体を把握していることより、草原における対個体と牧夫の距離よりもトナカイとのそれはより密であると言えよう。草原牧畜式の群単位の管理よりも、対個体管理の比重が従来のトナカイ飼育では高かったことが考えられる。このような異なる管理方法の融合は社会主義時代にモンゴル主導の元、草原牧畜のような管理群の大規模化や柵利用が進められた結果なのであろう。

まとめ

ツァータンのトナカイ管理は、「群単位の管理」と「個体管理」の両方によって行われている。この事実から、かつてトナカイ飼育が小規模群を対象に、「個体管理」技術を中心に行われてきたのが、社会主義時代にモンゴル主導の元に大規模群飼育に移行させられたという歴史をかいま見ることが出来る。こういった社会主義下におけるモンゴル式草原家畜管理方法の強要がツァータンの生活サイクルに変化をもたらし、さらには社会主義崩壊後の混乱を長引かせることとなっているが、その結果である現在のトナカイ飼育の実態をより詳細に分析し、かつ、もう一つの生業である狩猟採集漁労活動を研究していくことで、ポスト社会主義時代時代のツァータンの社会適応過程などが明らかになるだろう。今後も継続して研究分析を続けていきたいと思う。

(にしむら・みきや/モンゴル情報紙しゃがあ 代表)

アイヌ木綿衣服の比較調査：ロシアと釧路の3資料から

津田 命子

近年、世界の博物館にどのようなアイヌ民族資料が存在しているかという調査が進展するなか、『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』（1998年、Spb-アイヌプロジェクト調査団、草風館発行、以下MAE）が発行された。なかに近似の木綿衣2資料が掲載(p.26)されている。なぜか「MAE820 7」という同一番号なので「MAE ギンガム」と「MAE 鹿の子」と呼ぶことにした。このロシア資料と釧路市立博物館所蔵、資料番号445、（1940年採集、以下、釧路鹿の子）がたいへん良く似ていることを確認した。

詳細はMAE原典に当たっていただきたいが、『アイヌ文化研究におけるアイヌプロジェクトの意義』（荻原真子著、p.97）によると「1747年12月に創設20年のクストカメラ（現MAEの前身）は火災に遭い」、その中で12点の救出資料があり、「その採集地は千島と記されている」という。「記録が欠如している」というが、今のところ18世紀中頃の情報を伴う世界最古の木綿衣と考えられる。釧路鹿の子は調査をおこない、ロシアの資料はフィルム画像で観察した。この極似に何らかの関連性があると考えたが、双方の収集時期には190年ほどの開きがあった。これら3資料の共通項目を以下に挙げる。

材質はいずれも手織木綿布で30cm前後の狭い布幅の反物である。袖幅を1とし、後見頃の幅（背縫いから袖付けまで）との比較をした。釧路鹿の子は1対1.34、MAE ギンガムは1対1.39、MAE 鹿の子は1対1.83であった。ちなみに権太アイヌが入手した桃山時代の小袖（染1446、東京国立博物館所蔵）は1対1.72であり、MAE 鹿の子は小袖よりも小さい袖を持つ。一般的な現代の木綿衣は1対1から1対1.15である。3資料とも衿（オクミ）はなく、噴火湾地方の特色である襜（マチ）を伴う。縫合技術は絡み縫いで、縫合糸はいずれもイラクサ繊維である。絹の裂布の縁を折曲げ、イラクサでかがり、置布としている。刺繍はイラクサの繊維束を置布の一方に止め、置き布上で撚り糸とし、その撚り糸を芯糸に青絹糸で巻き縫いしてある。青絹糸の巻き縫いは密で芯糸を見せないものである。現代この刺繍技法は忘却されており、先行研究でも注目されておらず、全く触れられていない。左右の前裾と後裾に基本的に独立した同じパターンの文様を並べ、その刺繍はどれも一筆書きではない。これらの資料が作られた頃、現代一般的に見られる一筆書きのアイヌ文様は、まだ生まれてなかったと思われる。

3資料に共通していないところは、MAE ギンガムにはギンガムチェックの布が使われ、MAE 鹿の子、釧路鹿の子には非常に良く似た鹿の子文様の絹裂布が使われていることである。MAE 鹿の子にはないが、MAE ギンガムと釧路鹿の子には染抜いた家紋痕跡がある。MAE 鹿の子の裾文様全体には4カ所の不連続部分があり襜文様部分も独立している。釧路鹿の子は前裾と襜の文様が部分的につながるが、後見頃文様とは不連続である。MAE ギンガムでは裾の最下部に2本の置布が通して配置され、刺繍が施された3本目の置布によってつながれているが、その上部の文様パターンは独立性が保たれている。3資料では共通していないが、2資料に共通した部分が多く認められる。

以上のことから3資料が18世紀中頃の噴火湾周辺の狭い範囲の地域でつくられ運ばれたか、あるいは噴火湾周辺の作り手が移住した道東で製作したか等が考えられる。ロシア資料との比較から、釧路鹿の子は18世紀中頃あたりに作られた世界最古の木綿衣群に加えられる可能性がある。実物資料による比較調査が必要である。

（つだ・のぶこ／北海道立アイヌ総合センター）